



2024 AUTOBACS SUPER GT
Round 3 SUZUKA GT 3Hours RACE
JUNE.1 - 2 Qualify : 1st / Race : 1st

ポール・トゥ・ウイン！ ついに SUPER GT 初優勝を飾る



SUPER GT に 2024 年から復帰を果たした D'station Racing だが、岡山での第 1 戦、富士での第 2 戦とも速さは垣間見せてきたものの、タイヤのトラブルに悩まされてきた。チームではそんな状況を打開すべく、第 2 戦の直後に鈴鹿で行われたテストに 1 日のみながら参加。これが 6 月 1 日（土）～ 2 日（日）に行われた第 3 戦に向け、大きな意味をもつことになった。

迎えた第 3 戦の予選日となった 6 月 1 日（土）は、晴天のもと午前 9 時 45 分から公式練習がスタートした。事前テストでのフィードバックをもとに製作されたダンロップタイヤを履きコースインした藤井誠暢は、さっそく走り出しから好感触を得る。以前から鈴鹿に憧れていたチャーリー・ファグも、テストで鈴鹿を経験していたことで早々にペースを掴むと、ふたたび藤井に交代。この公式練習では藤井が記録した 1 分 58 秒 424 というベストタイムで 3 番手につけた。

晴天のまま午後 3 時から行われた公式予選では、Q1 の B 組から出走した藤井が魅せた。午前の好感触そのままに 4 周目にアタックを敢行すると、1 分 57 秒 894 という驚異的なタイムを記録。トップで Q2 のファグに繋いだ。さらに、Q2 ではファグがきっちりと 1 分 58 秒 296 を記録し 2 番手に。合算タイムで 3 分 56 秒 190 を記録し、

D'station Racing として SUPER GT における初めてのポールポジションを獲得してみせた。

6 月 2 日（日）の決勝に向け、最前列につけることに成功した D'station Vantage GT3 だが、心配だったのは雨。今季、ウェットコンディションでのレースがまだなく、どんな展開になるのかチームも想像がつかなかったのだ。実際、レース前のウォームアップでは雨が舞ったが、幸いスターティンググリッドでは晴れ間も差し、路面は乾いていった。

D'station Vantage GT3 は藤井がスタートドライバーを務めたが、午後 1 時 48 分に決勝レースの火ぶたが切れて落とされると、序盤からプッシュ。2 番手につけていた #61 BRZ とのギャップを築いていく。タイヤのパフォーマンスに自信はあったが、やはり少しでもタイヤは労りたい。藤井はある程度までリードを広げるとペースを切り替え、タイヤを労りながら高いアベレージを保つ走りに切り替えていった。

一時雨は舞ったものの、ドライのままの決勝となったことが D'station Vantage GT3 のレースを後押しした。藤井は 10 周で 3 秒以上のリードを築き、29 周を走りファグに交代。ピット作業の間に、序盤から追い上げタイヤ無交換作戦を敢行してきた #31 LC500h GT に先行を許したものの、

ファグは冷静にフレッシュタイヤのパフォーマンスを活かすと、ジワジワとギャップを縮め、45 周目のスプーンカーブで冷静にオーバーテイク。ふたたびリードを広げていった。

ファグは 61 周目にピットインを行い、ふたたび藤井にステアリングを託した。序盤から好ペースで追い上げ、最終スティントにタイヤ無交換作戦を行ってきた #2 GR86 GT が 2 番手に続いってきたものの、終盤には大きなリードを築くことに成功していた。藤井は 64 周目、2 分 00 秒 290 というファステストラップを記録すると、ふたたびタイヤを労りながら周回を重ね、85 周を走破。D'station Vantage GT3 は GT300 クラスのトップでチェッカーフラッグを受けた。

藤井にとっては 9 勝目だが、自らともに立ち上げた D'station Racing にとっては初めての優勝。これまで SUPER GT での挑戦の中では何度もトップに迫りながら、悔しい思いもたくさんしてきた。それはチームも同様だったが、今回はまさにパーフェクトなポール・トゥ・ウイン。「勝つときはこんなものです」というのはチームの歴史を紡いできた首脳陣全員から聞かれた台詞だった。

ついにその歴史を切り拓いた D'station Racing。しかし目指す高みはまだ先にある。初優勝に驕ることなく、チームはさらに前進していく。



COMMENTS :



Team Owner : Satoshi HOSHINO

ようやくポディウムの頂点に立つことができました。感無量です。公式練習からクルマが速く、上位進出はできると思っていましたが、ポールポジションを獲得することができました。決勝レースでも、なんとかその位置をキープしたいと逃げ切りを狙っていたものの、うしろからタイヤ無交換作戦のクルマなどがあり緊張しました。しかしなん

とか作戦どおり逃げ切ることができ、最後は大きなリードを築くことができました。本当、勝つときはこんなものなのかな、と感じますね（笑）。レースというのは面白いものです。次戦は真夏の富士ですが、タイヤも問題がありませんでしたし、次も上位を狙いたいです。この勢いをチームとして良い流れにして、他シリーズにも繋がりたいですね。



Director : Kazuhiro SASAKI

本当にすごいレースになりました。素晴らしい結果で、非常にうれしいです。開幕戦からずっと良いタイムは出ていたので、クルマに速さがあるのは分かっていたのですが、いろいろなことがありましたからね。でも、その悔しい思いからチームのみんなが頑張ってセッティングして、クルマを良くしてくれたことがこうしてポールポジション、そ

して優勝という結果に繋がったので、本当にチーム全員で勝ち取った勝利だったのではないかと思います。今までは2位表彰台がいちばん最上位でしたから、優勝する日を心待ちにしていたのですが、勝つときはこういうものなんだと思いましたね。本当にすべてがうまく運んだレースウィークになりました。



Supervisor : Tetsuya TANAKA

今年からチームに加わり今回が3戦目ですが、事前にテストを行い、ダンロップさんが良いタイヤを作ってくれたおかげで、こうして3戦目で優勝をすることができました。第2戦までも歯車が噛み合えばと思っていたのですが、今回はクルマが持ち込みからすごく良い状態だったと思います。ドライバーふたりもタイヤも、チームも完璧な仕事を

してくれました。勝てるときはこうしてあっさり勝てるんですよ。でも、そこで勝ちを拾うことに価値がありません。僕はチームの歴史をすべて観てきたわけではありませんが、やはり自分にもプレッシャーはあったので、優勝という結果を残せて少しホッとしています。これをきっかけにチームがもっと強くなっていければと思っています。



Driver : Tomonobu FUJII

今回は走り出しからフィーリングが良く、タイヤも構造などを見直してもらったものがすごく機能していました。またセットアップも改善しており、タイヤが良いパフォーマンスのまま持続できるという自信はありました。とはいえしっかりマネージメントしなければならぬので、序盤プッシュしながらもマネージメントしていましたが、良

いペースでギャップを広げられました。勝てる時はこういう感じなんですよ（笑）。今回はいろいろなものが噛みあった印象です。自分自身は2016年以降の優勝ですが、D'station Racing としてなかなか勝てそうに勝つことができなかつたですし、チームとしてのタスクをひとつこなすことができたので、そういう意味では良かったですね。



Driver : Charlie Fagg

最高の気分だよ！僕は子どもの頃からSUPER GTを観ていたんで、そんなレースで勝つことができたんだからね。前戦の富士では素晴らしいペースがあったけど、残念ながら結果を出すことができなかった。でも、ずっとレースをしてみたかった鈴鹿という場所に来ることができ、こうして勝利を収めることができて本当にうれしく思ってい

るよ。レースではバトルもあったけれど、僕としては確実にオーバーテイクできるようにしていたんだ。クリーンで、お互いに敬意を払う良いバトルができたんじゃないかと思っているよ。こんな素晴らしい機会を提供してくれたD'station Racing、藤井サン、チームのみんな、FRESH ANGELSのみんな、ダンロップタイヤに感謝している。

